

令和4年度 学力向上指導改善プラン

武庫小学校長 松田 文貴

学校教育目標		未来を生き抜く力と健やかな「からだ」の育成 認め合い 学び合い 高め合い	
推進主体		管理職と学力向上担当を中心に 学力向上推進委員会を設置	
学力に関する前年度の状況・経年の課題等			
学力の状況	これまでの全国学力・学習状況調査結果の状況(教科に関する質問紙調査の結果も含む)	◆質問紙の「授業でICTを使用しましたか」という問いに対して、以前は否定的な意見が多かったが、意見交換に使用しているという問いについては全国を30%上回っている。タブレットとペーパーの使い分けについて考えていく必要がある。 ◆問題を読み取り、題意を把握したうえで自分の考えを書いたり、その理由を話したりすることに課題がある。	○ICT機器を積極的に活用させ、文房具として使用しながら深い学びへとつなげられるように指導する。 ○質問紙の「5年生までに受けた授業で、コンピューターなどのICTをどの程度使用しましたか」という問いに対して、月一回未満と答える児童が0%。 ○児童アンケート調査で、「自分の考えをノートやワークシートに書いていますか」いろいろな考えを友だちと出合っていますか」の肯定的な回答を増やす。
	定期テスト、単元テストなどによる状況(各教科)	◆テストにおいて、記述での回答を要する設問において無回答の児童が各学級に数名いる。 ◆時間が経過すると、学習した単元については、忘れてしまう児童が多い。	○質問紙の「5年生までに受けた授業で、コンピューターなどのICTをどの程度使用しましたか」という問いに対して、月一回未満と答える児童が0%。 ○児童アンケート調査で、「自分の考えをノートやワークシートに書いていますか」いろいろな考えを友だちと出合っていますか」の肯定的な回答を増やす。
	授業等からうかがえる状況(各教科)	◆ベアークで、自分の意見を言える児童が増えつつあるが、何をどのように話せば効果的であるのか探っていく必要がある。 ◆また、全体の場で自分の考えを積極的に説明する児童は限られている。	○質問紙の「5年生までに受けた授業で、コンピューターなどのICTをどの程度使用しましたか」という問いに対して、月一回未満と答える児童が0%。 ○児童アンケート調査で、「自分の考えをノートやワークシートに書いていますか」いろいろな考えを友だちと出合っていますか」の肯定的な回答を増やす。
学習習慣・生活上に習慣化する等の習	学校評価などのアンケート調査やこれまでの全国学力・学習状況調査の質問紙の経年変化による児童・生徒の状況	◆過去5年の学力調査の結果から、家庭での学習や読書習慣に課題がある。	○読書習慣の定着。 ○児童アンケートの「家で本を読むのが好きですか」で肯定的な意見を増加させる。 ○学校図書館を活用し、当たり前のように身近に本がある状態を作る。
	校内研究状況・研修の状況	◆ICT機器の活用を進めることで子どもが主体的に対話的に、さらに深い学びができるよう、体育科を通して効果的な活用方法を探っていく。 ◆児童の生活背景や学力調査の結果をもとに、課題に対して個に応じた指導ができるように職員で共通理解する場を持つ。	○本校独自の「チェックチェックテスト」を実施し、児童一人ひとりの課題を年度始めに把握し、個に応じた指導に活用する。 ○週5日の「のびのびタイム」を有効に活用し、学年末に三田市算数検定を行い、基礎的な学力の定着を図る。 ○学習内容を定着させるために繰り返し同じ問題に取り組ませる必要がある。ミラインドのドリルパークの有効性を検証していく。
家庭・校種間連携	家庭・地域等の状況	◆児童の生活背景を十分に把握したうえで、児童理解に努めるとともに家庭学習や適切な生活習慣などを身に付けられるように保護者との連携を大切にしている。	○保護者アンケートの「家庭学習」の項目で肯定的な回答が90%以上となるようにする。
	小・中における教科連携等の状況	◆オープンスクールの参観、中学校の教師による出前授業(理科・外国語)が実施されている。また、生活指導担当教員での小中共同研修や特別支援学級の交流会が開催されている。	○年間2回、中学校の教師を招いて出前授業を行う。 ○3学期に中学校の授業を体験し、中学校への不安感を減少させる。 ○学校園所連携連絡会を定期的に開催し、学校間の連絡を密にする。
		4月	2～3月
学力向上に向けての重点的な目標		成果となる目標 (指標となる数値等)	具体的な行動目標 (成果目標達成のための具体的な手立て等)
		(今年度の成果と来年度に向けた課題等)	年度末評価 評価
		○ICT機器を積極的に活用させ、文房具として使用しながら深い学びへとつなげられるように指導する。 ○質問紙の「5年生までに受けた授業で、コンピューターなどのICTをどの程度使用しましたか」という問いに対して、月一回未満と答える児童が0%。 ○児童アンケート調査で、「自分の考えをノートやワークシートに書いていますか」いろいろな考えを友だちと出合っていますか」の肯定的な回答を増やす。	○授業で活用が進むように、校内研修会を多く持ち、朝会など教師が積極的にICT機器を活用する。 ○デジタル教科書やアプリケーションを積極的に活用することで、筆記が苦手な児童でも前向きに取り組めるようにし、算数の学習の理解を深める。 ○まず「次に」「だから」「そのわけは」「これによって」など筋道を立てた言葉を低学年から丁寧に指導し、リレー説明、なりきり説明、小グループでの交流など、自分の考えを伝える練習ができる場を多く設定する。
		○基礎的・基本的な練習問題に繰り返し取り組み、数や計算の知識、技能の定着を図る。 ○学期始めの「チェックチェックテスト」で、個々の成長を見取り、週5日毎日10分の「のびのびタイム」に自分で課題を選んで取り組みさせる。	○本校独自の「チェックチェックテスト」を実施し、児童一人ひとりの課題を年度始めに把握し、個に応じた指導に活用する。 ○週5日の「のびのびタイム」を有効に活用し、学年末に三田市算数検定を行い、基礎的な学力の定着を図る。 ○学習内容を定着させるために繰り返し同じ問題に取り組ませる必要がある。ミラインドのドリルパークの有効性を検証していく。
		○自分の考えを発表やノートづくり、タブレットを使った意見交流で表現することができる児童を育成する。 ○問題解決の過程を筋道を立てて、表現することができる。 ○児童アンケートの「いろいろな考えを出合っていますか」で肯定的な回答を増加させる。	○ノートやホワイトボード、黒板などのツールを活用し、式や図、表などを使った話し合いを授業の中に意図的に組み込み、タブレットとノートの使い分けを行っている。 ○長引くコロナ禍ではあるが、感染に配慮しながら、グループ内でノートやホワイトボードを有効に活用し、自分の考えを筋道を立て、他者に伝える活動的に行なったことにより、躊躇せず発表できる児童が増えつつある。式や図を有効に利用し、順序立てて話すことも少しずつできてきている。今後授業の中で話し合い活動を意図的に組み込んでいくことを継続して行い、筋道を立てて話す力を育てていく。 ○タブレットについては、体育の授業中チーム内で作戦を考え話し合う際に有効に活用でき、児童は意欲的に意見交流ができていた。
		○読書習慣の定着。 ○児童アンケートの「家で本を読むのが好きですか」で肯定的な意見を増加させる。 ○学校図書館を活用し、当たり前のように身近に本がある状態を作る。	○家庭読書、朝読書の取り組みの継続。 ○お昼の放送などを利用した、図書委員会の活動の充実。 ○毎月第3火曜日を家庭読書の日、週2日(火曜日と木曜日)を朝読書と設定し、1年間取り組んできた。朝読書は5分間ではあったが、静かに本を読む様子が見られるようになり来年度も継続していく。また、PTAの協力により4年生以上の学級文庫の充実を図った。来年度は1～3年生の学級文庫を充実していく。 ○図書委員会の活動を工夫し、図書室の本来の興味を持ってもらえるように取り組んだ。お昼の放送で読み聞かせや本紹介をしたり、クイズを図書室前に掲示したりすることで、本への興味付けを図った。 ○読書通帳が一冊終わった児童の名前を図書室前に掲示したことで、読書への意欲を高めた一つの手だてとなった。 ○家で本を読む児童が少ない。家庭読書の日は保護者も一緒に読んでもらえるように促している。
		○体育科の中でどのようにタブレットを活用できるか探りながら学校教育全体でICT機器を活用する。 ○単元を通した学習計画や授業のめあてを立て、見通しを持ち、それに沿って学習を進めることができるようにする。	○単元計画やめあてを見えるようにし、見通しを子どもたちと共有する。 ○単元や1時間の学習の計画の中に自力解決の時間を位置づける。 ○今年度は体育科の中でタブレットが有効に活用されているかを含めて検討した。他領域での活用も含め、有効な活用方法について校内研究で研究していく。器械運動や陸上運動では効果があったが、ゲーム領域ではタブレットの活用が難しいということが分かった。
		○児童の成長や課題、目指す児童像についての共通理解と個に応じた支援の充実を図る。 ○児童理解に関わる校内研修会や授業実践の交流会を定期的に開催する。	○定期的に研修会を開催し、児童理解や支援方法、支援体制を検討する。 ○児童理解に関する研修や支援体制について、校内委員会を中心に研修を重ねて取り組みを進めてきた。少しずつ成果が表れ、できた、わかったと自信を持って取り組む姿が見られるようになってきた。
		○家庭における学習習慣を確立する。 ○保護者アンケートの「家庭学習」の項目で肯定的な回答が90%以上となるようにする。	○家庭学習の手引きを配布することで、一つの指針になったようである。今後は、年度初めの学級集会などで話題に挙げたり、学年連絡にその様子を載せたりと教職員一人一人が意識を持って取り組むことでより浸透していくよう努めていく。
		○小・中での連携を行い、スムーズな校種間の接続を図る。 ○年間2回、中学校の教師を招いて出前授業を行う。	○3学期に中学校の授業を体験し、中学校への不安感を減少させる。 ○学校園所連携連絡会を定期的に開催し、学校間の連絡を密にする。 ○高学年では兵庫型教科担任制を導入している。各クラス担任が教科を担当することで中学校入学前により多くの教員が児童に関わる体験をし、スムーズに中学へつなぐことができる。時間割と交換授業が困難な時があったが、毎週の打ち合わせで調整することができた。 ○2学期終わりの中学校からの出前授業(今年度は社会科)や生徒会による「中学校生活の講話」を体験させることで、安心感をもたせることができた。